



美佐古館

冊數	書名美佐古館	函號	部類
一		二架一六	連歌俳諧

洋学文庫  
 文庫 8  
 B 127

三一八號





信天翁是、能間身亦免里、少  
信之翁士由自卷、首不題、  
維時文化戊寅春清、の後、言

人情畢竟愛親哉

園乃梅 三々

歌目ちやと心を證り

渡邊千枝藏

鶉野集

仙臺 士由虔人撰

友人 仙府馬年  
門人 盛園蘭卿 校

桐の芽乃遅し一葉成能多似  
朝飯や遊すや心も鐘のり  
見きりうとちりり系能たう  
神舞也、まの癖の胸噪き  
まの病乃まを也容の志し  
人乃柳をまを植し柳を  
道彦  
成美  
久藏  
洞々  
星譜  
一峨

多んを以て寂しむるを志す  
 川もや烟通し 此は亦乃廣  
 其の如く 静多の津乃神の子  
 石二とたぬ 才名是也 國一の毛  
 陽火を吐や 啜飲や 草蚕  
 吾もや アコマ 走馬 帆かけ船  
 酒祈 勢 植 打ん 襟 乃 花  
 山 吹の 入り つけ 三 嶺 山 志 皆 七 山

女

雄嶋 花仙 三雄 卓堂 宇考 和蘭院 国村 路猿

古きらハ新燕の  
 翅又カケまゝ一吟せり

東風吹や 猫も 扱子と 百十  
 何る 勢を 又 蝶ふを 寺 境 尼  
 つ又の 勢を 又 虎 寺 船 場 乃 那  
 折 襟 せ 又 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 襟を やり 分り 龍乃 筋も 皆 ぎ  
 鳥の 末 也 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 奇 持 子 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

南山 乙二 雄測 買月 互谷 子孝 太令

鹿日や田密柑乃津也  
 観ありや子りや唐の  
 降を漏庵を思ひし  
 西の風よ来りし  
 見ゆるを柳のま  
 梅又光津のけりし  
 春の雪消たを  
 清少納言紫式部  
 永日也  
 扇風  
 清女  
 亀丸  
 清矣  
 月哉  
 少緑  
 常婦  
 莖城  
 白規

夢合也  
 菜の  
 今日限の  
 世乃沖の  
 山吹や  
 夢や世を  
 雲風  
 第根路や  
 菘うけ乃  
 蛙黨  
 呉雪  
 東丸  
 有未  
 亀州  
 露洞  
 聞角  
 露曉  
 雪窓

華七日遊海心佛一連  
能ん人由我々々奴蝶の目と葉  
遊ふやうり流きりけりまの川  
梅名し其文渡りの闇き今里  
宦抱予吟境歩りか之春心  
何時来りも留まらぬ芽を吹  
四の尺二寸落るハ老し云々  
三文り代とふやうり啼一蝶  
世語論んたやう来や梅又月早し

竹止 也邑 秋角 東姿 左圭 翠居 梅居 完車 三雄

蝶飛や女毛刀如津一多 猿  
日暮る能ん入るこころ多  
清らと見申れぬ今日も落るる  
川もや 臨れぬもたう  
懐り入るるをさへも此石二  
小人湖居しと隔乃欄伐又り  
七十の今事も華ふ遠く  
響もや芽も出さるる  
通里始りて是又家を垣あふ

星壽 星丸 星山 星徳 雲志 士由 立富 士彦 菓樹

少年

世よりいふもあふまを嬉しむ事  
 学や書あはれ中の世持を  
 学ふ理を津けり中又く  
 魚よりく破の破を日之山第ふ  
 海舟ときききき癒ぬ梅乃兼  
 春の日にさる盈統けり乃乃重  
 学又似と多せめそあ創りさる  
 津えりしを始せり所喜れの柳が  
 月夜知をて観しと多きハる山

蛭宰  
 百學  
 天亮  
 春庵  
 熊眉  
 青牛  
 士觀  
 五長  
 園翠

女

常世清き花を居ころのそ花  
 梅の月煩悩乃あを第の破ぬ  
 旅人の日をもてりけぬと兼  
 浦波乃明る河津けり多兼ぬ  
 兎角目ふきり象余室の放き山  
 春の海にありふれや涉香山  
 庵のや董もけりあはる細  
 裸子や若ふの喜に津けりさる  
 花の多き花をてりさる乃のそ花

文哉  
 菊堂  
 高松  
 曙柳  
 世竹  
 左未  
 芙蓉  
 東魚  
 月村

幸や世やあまし 粉子の心も  
鳥の心さうく 借つてん 躑躅咲  
老を おもひ 老を 抱ちり 母子はく  
のつ けり と 老ふ かの さ 桜の 柳  
さふ 合ハ 梅の 華なり 横江し  
際 の まを 柳の さき 名を 付ふ 電  
心 律乃 習身 老の あり 老の あり  
甚の あり 双松 塔を 抱ちり 老の あり  
さ 竹の あり 臆し 鳥の あり 老の あり

笑鼠 章流 鄙丸 東翠 素羊 星国 鵬作 士由 魯卿

何たかよ ちも 老や 老の 習乃 二 老  
老の 日ハ 柳の あり 老の あり 老の あり  
月も 老の あり 腹つ 老の あり 老の あり  
老の 滴の あり 老の あり 老の あり 老の あり  
老の あり 老の あり 老の あり 老の あり  
老の あり 老の あり 老の あり 老の あり  
老の あり 老の あり 老の あり 老の あり  
老の あり 老の あり 老の あり 老の あり  
老の あり 老の あり 老の あり 老の あり  
老の あり 老の あり 老の あり 老の あり

画 中 泉 珀 青 湖 醉 月 玄 圃 斗 真 春 潭 古 人 卜 因 孤 穴



牛はのふ人々骨又董婦む  
 饒楚をて十日もあし柳如女  
 学い遠く一遠ひう藤を池く境  
 落るるをす多く長城月夜多  
 老松このま 終 羊群抄を  
 知をを撰を 鳥さう情小多  
 茶う世をあはさる今日ハ七日か  
 塵乃細せやてりまらに 花二日  
 時鳥まわう情や 勝士う里  
 古水  
 文人  
 姿水  
 志雄里  
 琴丸  
 立圓  
 立明  
 孟皎  
 とよ女

月乃多物書あまし 花う月  
 羊群の山池のまは是等かふ世夏  
 茶乃中ちうの津才又ちあはる  
 喜書や 田原の歩の 小菰際  
 喜あま 野の池を多う 柳境在  
 柳境を抄終し子等遊池  
 臺乃目の佛も兼は様境う那  
 假神の爪先もをう 向小多  
 烟動日唯の世の業又う 家やまの波  
 輝潮  
 鳳臺  
 葛父  
 如山  
 如山  
 庄山  
 如柳  
 林々  
 挂舟  
 一岐



京都

茶子と山人戯寫



世の老婦や四角の越後梅も何ぞ  
樹もあふまゝ涼し巖は為鈍  
身かたせぬの月あはれ出草刈の葱  
藻乃美や海き家あゝ死にかな  
古書は解調音なりゝ交る意菊  
山あそびし様もあゝ志を以秘松  
死世も松松思もあゝや尺時針

十八宮田町とちふ松林  
路をたへはかき出したふまゝ

平角 小湊 英里 防人 五松 谷村 路猿

友在り明きふれ多し里多岐山  
舟の舟乃有舟舟月の舟の舟  
舟の舟乃有舟舟月の舟の舟

松徑  
古翠  
英李

此の章ハ論急ハ世東豊ハ

并耀ハ記れハハハハハハ

是也此明出粟車も急舟舟舟舟  
舟接又すれハハハハハハハハ  
端舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

蘭史  
文常  
有裴

杜有以之を以て例也

曰人

再仙府ハ思ハハハハハハ

本のハハハハハハハハハハハハ

且ハ

身老則衰也

若又た多ハハハハハハハハハハ  
坂乃腹ハハハハハハハハハハハ  
若也ハハハハハハハハハハハハ  
邂逅ハハハハハハハハハハハハ  
大計ハハハハハハハハハハハハ  
短夜ハハハハハハハハハハハハ

馬年  
百兆  
春魯  
三醒  
亀子  
其道

何所也もる果の香を遠しる乃月  
葦の蔓河を引渡しすおき秋家  
子ありと縁河利是の夜は夕涼  
高きなけ母耳きこし 甘鳥

細きも地もたふんしをきよ

際起よ久つをきし中 櫻を織きん  
月かおれき理を遠し 杉らう家  
夏夜しすか夢このふ夜 秋暮の夜  
濡竹や不尽見家人乃あきき白

星国

女 星壽

女 晚翠

女 家月

女 鶯

ト二童 兎

如山

巖水

耳鳴毛も吹く吹こ けり 楓  
樹多欲年夢月もやるも 河津  
寂しきと後遠よおそ 家古き  
膝乃子成弓ふ新 夜暮る 秋  
物の香はをけきあさよ 苔乃 葦  
入城親月か 月 杉乃 燈  
唐書と 乃 血を 如日 杉 磯 涼  
釣葱 狭い 夜 ぬき 目よ 杉 涼  
露に 永 静 夢を 家 乃 杉 涼 夢

巖月

竹志

順女

松御

女 當麻

嵐月

杉耳

轉齋

五童

引<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>世<sup>よ</sup>深<sup>ふか</sup>の<sup>の</sup>世<sup>よ</sup>も<sup>も</sup>也<sup>や</sup>蒼<sup>あは</sup>き<sup>き</sup>  
松<sup>まつ</sup>の<sup>の</sup>葉<sup>は</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>塵<sup>ちり</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>日<sup>ひ</sup>也<sup>や</sup>衣<sup>い</sup>の<sup>の</sup>  
眼<sup>め</sup>出<sup>で</sup>粟<sup>あは</sup>一<sup>いつ</sup>重<sup>じゆう</sup>も<sup>も</sup>心<sup>こころ</sup>  
涼<sup>すず</sup>し<sup>し</sup>は<sup>は</sup>小<sup>こ</sup>な<sup>な</sup>津<sup>つ</sup>す<sup>す</sup>如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>れ<sup>れ</sup>津<sup>つ</sup>が  
山<sup>やま</sup>の<sup>の</sup>波<sup>なみ</sup>も<sup>も</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>き<sup>き</sup>こ<sup>こ</sup>波<sup>なみ</sup>波<sup>なみ</sup>  
ち<sup>ち</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>多<sup>おほ</sup>さ<sup>さ</sup>や<sup>や</sup>暮<sup>くれ</sup>松<sup>まつ</sup>  
馬<sup>うま</sup>買<sup>か</sup>ひ<sup>ひ</sup>に<sup>に</sup>二<sup>に</sup>日<sup>にち</sup>出<sup>で</sup>り<sup>り</sup>利<sup>り</sup>時<sup>とき</sup>多<sup>おほ</sup>  
ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>や<sup>や</sup>虫<sup>むし</sup>庵<sup>あん</sup>と<sup>と</sup>見<sup>み</sup>な<sup>な</sup>す<sup>す</sup>と<sup>と</sup>苔<sup>こけ</sup>の<sup>の</sup>毒<sup>どく</sup>  
舟<sup>ふね</sup>乃<sup>すなは</sup>ち<sup>ち</sup>埃<sup>あは</sup>の<sup>の</sup>な<sup>な</sup>ん<sup>ん</sup>も<sup>も</sup>是<sup>こゝ</sup>浪<sup>なみ</sup>田<sup>の</sup>の<sup>の</sup>波<sup>なみ</sup>

白阿更 杜同  
晋莪 卜居 士彦 百樂 天亮 圃翠 心阿 世竹

有<sup>あ</sup>終<sup>つひ</sup>を<sup>を</sup>吟<sup>ぎん</sup>如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>何<sup>なに</sup>の<sup>の</sup>美<sup>み</sup>  
行<sup>ゆ</sup>空<sup>くう</sup>を<sup>を</sup>蒲<sup>ふ</sup>田<sup>でん</sup>の<sup>の</sup>蒲<sup>ふ</sup>墨<sup>ぼく</sup>郭<sup>かく</sup>公<sup>こう</sup>  
不<sup>ふ</sup>二<sup>に</sup>の<sup>の</sup>夜<sup>よ</sup>を<sup>を</sup>活<sup>い</sup>し<sup>し</sup>如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>柳<sup>やなぎ</sup>  
飯<sup>い</sup>敷<sup>し</sup>ふ<sup>ふ</sup>足<sup>あ</sup>す<sup>す</sup>も<sup>も</sup>家<sup>いへ</sup>や<sup>や</sup>紫<sup>むら</sup>藤<sup>とう</sup>の<sup>の</sup>種<sup>たね</sup>は<sup>は</sup>う<sup>う</sup>  
か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>せ<sup>せ</sup>も<sup>も</sup>や<sup>や</sup>船<sup>ふね</sup>又<sup>また</sup>火<sup>か</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>す<sup>す</sup>如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>  
合<sup>あ</sup>歡<sup>くわん</sup>を<sup>を</sup>如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>や<sup>や</sup>床<sup>とこ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>人<sup>ひと</sup>通<sup>とほ</sup>り  
如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>を<sup>を</sup>な<sup>な</sup>す<sup>す</sup>如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>  
山<sup>やま</sup>越<sup>こ</sup>え<sup>え</sup>を<sup>を</sup>き<sup>き</sup>き<sup>き</sup>る<sup>る</sup>ふ<sup>ふ</sup>少<sup>すく</sup>少<sup>すく</sup>如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>杜<sup>と</sup>宇<sup>う</sup>  
柄<sup>へい</sup>を<sup>を</sup>如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>傘<sup>かさ</sup>や<sup>や</sup>時<sup>とき</sup>多<sup>おほ</sup>

晋鳥 不仙 宦柳 曉山 梅一 田二 北水 綾丸 凡年

十三童

存華の買置とせし郭公  
 壺天  
 之を如きや牡丹の根も錦を  
 東端  
 引管房敷管を誘ひ多利  
 敬之  
 一日を抄臥遊せ郭公  
 富泉  
 意ありて牡丹十日も後きり  
 琪水  
 世年系山家此より押さる  
 東榮  
 牛涼し二親を端り藤せし  
 守一  
 菖蒲沼や池根の濁を引かり  
 其舟  
 物ありをふ竹葉の多し  
 左立

立仙更  
少年

短髪や藤も存夜の人此数  
 鞍床  
 毎日をそ遠魚一亭  
 方耕  
 梅又の月まは見えぬ田植の  
 比布義  
 涼しきぬ泥里や奥乃ありけり  
 東臯  
 ぬきの婦利志より女も也来るぬ  
 三齋  
 の津き父む戸年まはぬ也夕牡丹  
 芳齋  
 押囀ひして芍菜又ちるり  
 士由

稻妻や京を冠う人馬の上  
 何處も秋をのきく境 萩芒  
 稲妻乃阿多を以て國也 宮上川  
 一粒も埒れすむ妻淨竹の露  
 秋の夕九十日又一度日ハ遠し  
 露さきし海境遠山見申を起  
 葛三 寥松 石海 不材 大巢 野松 素磔 蘭郷

鳴きや馬車一教教 櫓の穴  
 船かけそねる余そそ 紗の舟  
 灯せそ支力よあ家 枯野の鳥  
 世のゆりふ階い遠き 曼珠沙華  
 彌助掉せ原無漆をけや 友の船  
 谷雄 琴雨 謀價 芝山 足彦

出ハ終り乃まのし  
 ましたる余を以て終り又サ四

庭又出て物多ふ里や 萩乃若  
 光る空を逢ふ星の柱や 不二の山  
 仙人 巢居 仙坡



竹の戸乃徳也、月見も奴の徳  
 空をぬく月見、人の馬りあそ  
 芦の穂也、先度乃客の状、  
 葉也、雪を吹き出たり、船乃細  
 琴、梅もハ心、  
 露、栗乃香也、寒味も、竹の物  
 照在也、人の中、  
 障、ハ、秋、ま、  
 さを、津、  
 馬年  
 和節  
 蒼溟更  
 舟居  
 涼堂  
 成子  
 諂李  
 巢樹  
 与竹  
 邑推

老母竹、  
 夜の底、  
 梅、  
 明、  
 雪、  
 悪、  
 無、  
 秋、  
 一、  
 稻乳  
 耳二  
 椿年  
 柳雪  
 三旦  
 挑英  
 保知字  
 秀阿  
 柳郊

雲の月今をりて暮乃松  
向ふきおぼや燈も改と遊  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點

松 柏  
波 心  
可 樂  
松 路  
杜 函  
女 玉 蛾  
桂 扇  
市 陽  
曉 水

強き乃世をさうそち歌  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點

東 舟  
樵 歌  
南 揚  
祐 素  
女 羅 扇  
士 田

丁丑の代  
侍者乃世はあつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點  
あつゝを石二そむる日也點

山菜花を枯葉中も 竹枕  
 節季候を乃牡丹唯為跡  
 風の古は物なり 借法か  
 十月唯中の十日乃 採切り  
 雲見き冬也 筑波沖 裏日私  
 二心来てま如身 芳敷や 鱗鱗  
 晴晴や日頃 押合ふ家なり  
 明るく一基か 出ること ちたれ  
 北堂

物ふ飽き 雲を覗き 眼鏡か  
 偽る人 弓なり 河原か  
 風也 雲は身一 虎咆  
 冥々

中々さういふ枯葉の中を  
 まく 採切つて せし 枯葉なり

何ものなき 雲也 呼を唯 三味線古  
 冬枯く 々きの 枯し 枯  
 冬枯也 人唯 一期を 不回なり  
 蒼葉 楚なり 笠い 笠なり 也 胴 兵 子  
 東臯  
 士由  
 餐英  
 三及

本炭燻てきりし雲の雨り多敷  
 酒を方焼ききりし神甘雨  
 磨を斧焼ききりし知能を多敷  
 神を能道焼き中を満の雲  
 世のをほゆや陣中をいよ海の雲  
 物中を今衣もたけきりきり  
 葉の女もし陣中をいよ海の雲  
 柳を鳴雲を枯野焼き主人の雲  
 雲を焼き柳焼き

二具  
 杜同  
 免州  
 干必  
 士竜  
 立富  
 立邦  
 如筵  
 文桂

十月焼ききりし雲の雨り多敷  
 雲の女もし陣中をいよ海の雲  
 柳を鳴雲を枯野焼き主人の雲  
 雲を焼き柳焼き

一之  
 文葉  
 巾蛸  
 簫客  
 知羅  
 桃之  
 秀彦  
 葛予  
 天有



嘆世よりまき草とあふふ小舟松  
 士由  
 垣一板ゆき 蒲生をわき  
 馬年  
 川舟をまき置 乃松へ引あけり  
 由  
 月夜 支度 舟をまき 乃松へ  
 年  
 三粒 舟をまき 乃松へ  
 由  
 帰心 舟をまき 乃松へ  
 年  
 志賀 舟をまき 乃松へ  
 由  
 常 舟をまき 乃松へ  
 年

舟をまき 乃松へ  
 由  
 波もまき 乃松へ  
 年  
 舟のまき 乃松へ  
 由  
 舟のまき 乃松へ  
 由  
 舟のまき 乃松へ  
 由  
 舟のまき 乃松へ  
 由  
 舟のまき 乃松へ  
 由  
 舟のまき 乃松へ  
 由

代字の如く歌仙の如く傳へる

由

管より起る流則を待りし

士由

葦の根松をりし神を

九年

身より起る流則を待りし

東端

城の修葺乃論なり考り

波心

浪の波そるす我を乃舟

梅南

管身より起る流則を待りし

壺天

薫と真管乃裏り起る流則を

有揚

額もに多鯉口と

敬之

活佛定早雨忌を起る流則を

富泉

七浪安春魚あめ歌

可樂

考津地をりし甘雨を起る流則を

東榮

管身より起る流則を待りし

羽遊

浦系か澄おのれもかけ仕る

翫市

森より起る流則を待りし

蟻宰

漣の如く明流しと掬しあけ

立富

只子酒生此類日乃雲  
吟をよほき河に宿つて舞の候  
去乃飛くく手さるる 法師  
琴丸  
其道

執筆

衡鳴日さく夜うゝ帆廻る家  
浪情こす花片町乃雲  
系楸の眠夢をよしつ竹踏る  
海盆乃何故かなるさる  
三日月のまゝを透る芦の落  
葛予  
知羅  
亀水  
士由  
桃之

巾すきハ落敷柿老淋しき  
漸晴る雨の垣穂り稻こけり  
二月乃乃乃夕市また川  
着またもはまき人な假面小うさ  
泣顔直 髪磯ありせえ  
百合の香乃外又を照もほる色  
夜多しはくくしり 多き曇領  
丹返ハ綿の直はの艶伏見照  
石きせくく多子装ゆね風  
巾蛸  
秀彦  
百古  
天亮  
輝潮  
其聲  
素明  
林々  
竹止



画に見えしそまぬのぬるの藤ふ藤を  
 もだ勢ふふ舟をせや川に待たる  
 野鼠も穴より居ほぬまぢれ也  
 ちかこそまき亭見ゆ家小鳥居  
 士由 孟皎 杉耳 潜竜

後述を去る津ううたるせう世こ  
 此撰うとの友をのあひこり友まき  
 社裡のまひくこまのまの

江戸橋を鼻突合ふや 郭公 燕市

野狐も聳り行者母甘酒ふ家  
 借牛舟逃たりなは亭時雨う  
 美路の照掛雲も雪を解うあま  
 楯乃火や雲の巾鞋身煙た川  
 鳩吹と吹亭老し領捨古  
 夢路浮世をま一郭公  
 綿娘いこやすすそゆ波母落  
 浅草野や惜いまそ崎千鳥  
 右の夜をましを麻亭仕まぬう  
 行脚 且 東峨 淋山 女 志丹き 巨山 桂黛 翠居 羅州

何人の笛也印存乃河原芝  
霞園一成多二日女時鳥  
葉撮と多しを屋敷迄の庵茶  
鴉を森し神瀬も近しな木を  
時鳥啼や冬に霞の臭き  
窓蓋多閑多も雪春去空を  
啼麻もぬま乃木の宿新蛭子等  
雲脚も都筑をむ州春の風  
多楓大吹花脚も通里より

梅英  
竹富  
文好  
播雨  
二蘭  
雨鶏  
蘭舟  
百且  
素明

芍菜や葉の影影籠波  
雀等も拾若きいあ天気春  
寂し梅、咲く鐘聲噪しき  
真つ向り嵐打の音、蜀魂  
雀子の音を多し、たも牡丹の香  
系路やけけり志と秋夜の歌  
満存や一木も、舞下、此客  
芦の芽や、婦人の花、あ、解の泊  
いゝゆ、乃、春もすねたり、藤乃を

亞万  
其聲  
東州  
其圭  
正三  
東雄  
潜竜  
無底  
伎山

足代の人乃下行乙鳥うま  
 里雄  
 鷺啼や屋根沖上より浅茅原  
 来蛙  
 馬鹿聳り細せりまきたるし鳥衣  
 探虎  
 近江のやうにまをす時多鶴分  
 者来  
 必重乃たすふ小減るや船の垢  
 五梅  
 奥山の杉もそそやせ冷し汁  
 北平  
 負ふた子乃藤新と似ては董  
 友々女  
 月夜をみよこりなむ大根  
 加年  
 川鴈を見やう見えぬは鴨もたて  
 木鳳

涼しきや飛弾の匠、橋も嘘  
 永川  
 吹やうふのぬき風の去るをめ  
 行脚 士祥  
 涼しきや夜も橋がしすせ  
 曙山  
 蠅淋しきやゆきも奥のま  
 壺山  
 雨りなれぬや彼岸のあはせけ  
 鶯溪  
 形もあはれぬもなつて惜まぬ  
 橋州  
 春の雨或は地を別 陣のほろ  
 月居

あつ友の赤唐和鳴よ志事人何ぞうまの伊具郡角田と  
 いふれは住す眼科もて奥の雲東山よのつる名をきくうらとそ  
 余おの天りりきし御身雲窓金令舎乃百棒を愛りて頗  
 阜見高致あり志の終じもや中かみ終る遊ひて句と  
 吐す稀りし自測明くや張乃琴り比表偶吐所の抄 毎谷



一  
 丁  
 一

仙臺国分町  
 加志和屋正六様

一  
 丁  
 一

コ  
ミ  
ハ  
シ  
マ

Koko no Enwa no  
 爰、浦、

Visamatu aimadunro no jinko,  
 又松熊十郎、曰  
 Misagoto gun tou seki kan ne sica  
 “十”上云、鳥石筒、鮮  
 Wo-taen, Sono adi way sanakada ka  
 “野”其味、十、又佳  
 napit, jema sendaieno furiun ga  
 “十”今、仙臺、十由、  
 toeketa sici mo nan boo enwa  
 “十”又、又、十、十、  
 ga beija vitte kociid mitaay,  
 “十”十、十、十、十、

